

## 岩国市芦山家に伝わる婦人臓図について II

片岡 勝子

高陽ニュータウン病院

東京大学所蔵の『玉碎臓図』（以下、東京大学図と略称）は、明和8年12月（1772年1月）に2日間かけて行われた観臓を山脇東門が菅原誠意に描かせたもので、一卷に軸装されている。図は頸部断面、乳房、胸腹部筋、胸腹部内臓前面、腸を持ち上げて子宮を見る、胸腹部内臓背面、心臓、肺、肝、胃、膀胱、胆、腎、脾、子宮、脳硬膜、脳、眼球、舌、骨格系の順になっている。巻末に橘陶（東門）による跋文（橘陶の押印）があり、その日付は安永三年臘月（1775年1月）で、観臓より3年を経過している。

岩国市の芦山家は江戸時代より続く医家で、婦人臓図が伝えられている（芦山家図）。この婦人臓図は基本的には東京大学図と同じもので、全ての図が両者で一致している。図の順序をみると、胸腹部内臓前面、腸を持ち上げて子宮を見る、胸腹部内臓背面、心、脾、子宮、脳硬膜、脳、眼球、舌、頸部断面、乳房、胸腹部筋、胃、膀胱、胆、腎、肺、肝、骨格系と不自然で、表装の際に間違っただけと考えられる。なお、芦山家では数十年前にも表装替えをしており、順序の間違いが何時起きたのかはわからない。

芦山家図では、東京大学図と同じ跋文（橘陶の押印なし）の後に「寛政四年壬子四月応坂本生需 法眼橘之豹書」として押印がある。之豹は東門の長男である。跋文の写しと、この之豹の落款のある一行は同じ手で書かれたものと考えられる。なお、坂本家は吉川藩で御番医、御匙を務めた家柄で、跋文中の坂本生は、5代喜庵と考えられる。

私どもは、芦山家図が原図、東京大学図はそれを浄書して山脇家で正本とした可能性が高いと考えている（第109回日本医史学会総会）。以下、両図とも「婦人臓図」と記す。

「婦人臓図」では、胃や脳硬膜の血管など、写実を目指したことが伺えるものの、肺は左右ともに2葉で、心臓の剖面や子宮など、現在の知識からは理解に苦しむ表現になっている。ほぼ同時代の河口信任の『解屍編』（1770年解剖、1772年出版）に比べると、「婦人臓図」では腸間膜、虫垂などの観察・描写が優れているものの、反面、『解屍編』では肺が左3葉・右2葉と正しく、心臓の外形も優れている。「婦人臓図」でもっとも驚くべきは、骨の描写である。

骨図には、頸椎を除く体幹の骨の前面の描写（「自肋至腰骨前面」）、同側面、下位3腰椎・仙骨・尾骨の前面（「八膠前面」）、同側面、同後面（「同外面」）、上面（「同横截」）がある。

体幹の骨をみると、胸骨柄は辺縁不正な楕円形で第1肋骨が付着、第2肋骨は胸骨柄と体の境界に付着し、第3-7肋骨は、それぞれが胸骨体に付着している。第10肋骨は第9肋骨に、第9肋骨は第8肋骨に付着して胸骨体に至っている。浮遊肋は見られない。剣状突起は舌状で胸骨体の後から飛び出している。肋骨の付着より下で仙骨に至る椎骨は13を数える。寛骨の形は奇妙である。2日間の観臓で骨まで観察することは困難であり、このような体幹の骨からは、人骨標本を観察したかどうかとも疑わしい。すでに根来東叔『人身連骨真形図』（1741年）には、胸椎12、肋骨12対、腰椎5が描かれているのである。

これに対し、「八膠」と名づけられている下位腰椎、仙骨、尾骨をつなげた部分は、極めて写実的に詳細に描かれ、立体感やリアリティに富んでいる。観臓から跋文が書かれるまでに3年あったことから、骨を晒してから図を完成させたか、あるいは別人の骨を描いた可能性も否定できない。いずれにしても、画室で骨標本を観察し、十分な時間をかけて描かれたものであろう。

なお、東門による『婦人臓図』は千葉大学にも所蔵されている。これは東門と親交のあった中嶋孫信が菅原誠意に作らせた副本であることが皆川淇園の跋によってわかる。三者の比較検討が必要である。